

## フランス学派と歴史地理学

谷岡武雄

偉大な人文地理学者、ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュを祖とし、その特色が、地誌研究における輝かしい諸業績とともに、歴史的素養の深さにあるとされる今日のフランス学派<sup>⑥</sup>にあつて、歴史地理学がさほど振つていないようにみえないのは、筆者がフランス滞在中に、もつとも意外な印象を受けたことがらの一つである。海峡を西へ越えた白崖の国では、ダービイを始め、多くの学者が輩出して、着々と成果を挙げているのにひきかえ、かつてディオオンが、「歴史の古いフランスこそ、文献の豊富さ、新しい研究の広汎な可能性において、歴史地理学のもつとも有用な舞台である<sup>⑦</sup>」と述べているこの国において、歴史地理学関係の専門書とされるものが、予想外に少ないのは、どういふわけであらうか。

それは一つには、この国特有の教育制度に、もう一つは、地理学の再組織ルグリュイブマンからむ事情に、由来しているように思われる。周知のごとく、フランスの初等教育においては、一・五〜二時間が、リセーにおいては三時間が、歴史と地理の学習に配当されている。両者は日本のように社会科を構成することなく、系統学習の方法によつては、その間に密接な連関が保たれているのであつて、そのために大学のリサンスの課程において、高等教員の免状 CAPES

を得ようとするには、地理学と同程度に歴史学の単位を履修しなければならない。地理学の講義において、歴史に蘊蓄を傾ける教授があり、歴史学の研究所に製図室が附設されているのも、右のような教育制度の下に成長して来た研究者にとっては、至極当然として受取られることがらである。しかしながら、このように歴史と地理とが何らの心理的抵抗もなく、いわばアプリオリに一对をなすものとして考えられて来た一般的な環境は、両者の境界を不分明のままで温存することとなり、ぎりぎりの線において地理を歴史に対決させ、そのグレンツに關する徹底した思索の中から、歴史地理学の成立根拠を見出してくるといふ基本的手続きを、なおざりにせしめたのではないかと思われる。存在するのは歴史か地理かであり、両者はほぼ同程度に学習されている以上、こと新しく「歴史地理」を主張しなくとも……というような雰囲気、英・米・独・澳諸国の傾向に反して、地理学科の中に歴史地理学の講座を設置するところがほとんどなく、歴史地理学の体系樹立へ向つての積極的意欲が少ない理由の一つであろう。

一九二三年は、かつてヴァイダルが旧来の地名学的・百科辭書の傾向を打破して、地理学を大転回せしめた今世紀の初頭にも比すべき、まさに劃期的な年であった。すなわち、同年にソルボンヌの地理学研究所が開設され、今まで地質学・地球物理学・氣象学等に分属していた自然地理学と、歴史学の侍女に甘んじて来た人文地理学並びに地誌は、ここに再組織され、名実ともにユニテールな近代地理学が、文学部の枠の中で確立されるに至つたのである。これに關する最大の功績は、文学と理学との二つのタイトルを合わせ持つエマニュエル・ドゥ・マルトンヌに歸せられよう<sup>③</sup>。いいかえれば、人文地理学は、自然地理学と合体することによつて、永い間にわたる史学への従属から脱却し、みずからの独立を獲得することができたのである。同じことは、自然地理学についてもいえよう。しかもこれが、文学部の中においてであることは、この際とくに注意しておかねばなるまい。それはともかく、ひとたび独立の

味を覚えたものは、旧主からできうる限り遠ざかろうとする。専攻の学者の胸中深くに潜む、このような歴史学に対する無意識のレジスタンスが、フランスにおける歴史地理学の不振をもたらした、もう一つの理由ではないかと思われる。不振……これは他の分野と比較した場合のことである。歴史地理学は、この国において全く無視されているわけでもないし、新しい傾向の芽生えさえ感じられる。以下筆者は、地理学界・歴史学界・本来の歴史地理学界の三つに分けて、この方面についての諸業績や傾向を辿ることにしたい。

## 二

歴史学ないしは地理学における歴史的方法に対して、フランス学派の中には、相反する二つの態度がみられる。アルベール・ドゥマンジョン、一九四〇年にパリでその生涯を閉じたこのヴィダルの高弟こそ、史学に精通し、人文地理学における歴史的方法を強調した傾向の代表者たる名を、恥かしめないであろう。一八七二年に東ノルマンデイの一農村に生まれた彼は、長ずるに及び、エコール・ノルマル・シュペリエールにおいて歴史と地理とを学び、卒業後リセーの教育に従うとともに、ピカルディ平原のフィルドワークに、若い情熱を傾けた。その後再びパリに戻り、学生監としての四年を送るのであるが、その間の生活の半ばは、自然地理の問題の解明に必要な自然科学、とくに地質学の学習に宛てられ、他は人文地理学の基礎的教養をなす歴史学の知識を補うために用いられた<sup>⑥</sup>。このように広い教養と綿密な実態調査が、地誌のモデルとまでいわれた「ピカルディ平野<sup>⑦</sup>」に結晶するのであるが、師のヴィダルに捧げられたこの博士論文が、地理学の立場から古文書をいかに取扱うべきかを考察した書<sup>⑧</sup>を、副論文としてしていることは、甚だ興味のあるところである。地理学と古文書、地理学的観点からの国立史料館蔵諸文書の検討、古文書の観点からの地理学的諸問題の検討、以上三部から成る本書は、筆者もときおり世話になったことのあるアルシ

ーヴ・ナシヨナルに関するもので、地方文書には触れないが、地理学徒にとってどのような古文書が存在し、それはいかに取扱われるべきであるか、その研究から自然の改善・生産活動・人口等の地理学的な諸問題が、いかに解明されるかを示したものと高く評価される。地理学者にしてこの分野においても歴史家に匹敵する能力をもつ彼は、本書によって、史家に手慣れた研究方法を、科学的地理学の中に合理的に導入する道を開いたといえよう。

ひとたびリールと呼ばれ、そこに六年間を過したドゥマンジョンは、一九一一年にソルボンヌに迎えられ、以後ヨーロッパ各国の地誌、農村集落研究等に精力的な活躍を示したことは、あまねく知れわたっている。われわれは彼の文章の随所に、深い歴史的教養を容易にみつけることができる。しかし彼はフランス学派の例にもれず、理論の構成よりも実証的研究を尊重した。したがって、地理学と歴史学との関係とか歴史地理学の意義とかについてのまとめた見解を、彼が生前に著わした筆のあとから辿ることはできないが、幸いにも遺稿として後日に発表された「人文地理学の定義」⑩の中には、この方面についての考え方を知りうる手掛りが残されている。彼は人文地理学の方法として三つの原理を挙げているが、その第三が、諸事実の進化を考究し、過去にさかのぼる、つまり歴史にたよる方法である。多くの事実は、現在とともに過去に機能されている。年代の概念、進化の概念は、地理学にとって必須のものであり、それがなければ、現に存在するものの理由づけは不可能である。地理学者は、観察する諸事実を説明するために、それらを合理的に空間の中に位置づけることで満足すべきでなく、それを歴史の中に投影して考えるべきであると、主張するのである。

右のように、地理学における歴史的方法の重視とその実証は、歴史地理学の理論づけとは直接関係がない。だがその有用性を示す一つの証拠となりうるであろう。そうしてこのような傾向は、フランス学派の中でも、とくに人文

地理学を専攻する学者の間に、多かれ少なかれ共通してみられるものである。それはたとえば、ドウマンジヨンの女婿パールピユ教授の著書において、遺憾なく發揮されている。同教授の歴史的知識の豊富なことは、定評のあるところであるが、リムーザン地方を取扱った博士論文が、自然地理書でありながら、最後の一章はリムーザンの概念の歴史的發展に関する考察に宛てられているのである<sup>⑧</sup>。同時に出版されたこの地方の農村景觀に関する研究<sup>⑨</sup>は、土地台帳の分析に基いて、現在なお続けられている土地利用の発達についての労作の一部をなすものであって、ここに至れば、もはや完全な歴史地理学に属するといえよう。われわれは、同じ傾向を農村集落並びに農地構造の研究で知られたA・メイニエやE・ジュイアールの中にみいだしうるし、また若い自然地理学者にして、古文書の利用に優れた才能を持つものさえ筆者は知っている。

地理学における歴史的方法を尊重する、いわば伝統的な立場に対し、地理学からできるだけ歴史的なものを排除しようとする傾向も、一つの流れを形成している。前者が人文地理学の畑の主流をなすとすれば、後者は自然地理学者の中に往々みられる態度である。現存の地形学者の総帥とでもいった地位を占めるアンドレ・ショレーこそ、その代表であろう。彼はそのことをしばしば主張しており、それがたとえば農地構造と農村経済の諸問題についてのエッセイの中に、極端な形であらわれている<sup>⑩</sup>。彼はその中で、農地構造と農村集落とは必ずしも対応せず、しかもその背後には常に自然が控えていることを強調して、かつてのドウマンジヨンの主張<sup>⑪</sup>に対し、暗に否定的な見解をほのめかしたのち、大要つぎの如く述べている。農業活動なるものは、自然・生物的・人文的・政治・経済的な諸条件に規定されたコンプレックスが外部に表現されたものであって、その具体的なあらわれが、地表空間の占居・力動的な

空間的拡大・その循環的あるいは非循環的進化となる。そうしてこのような事実を解明する方法としては、歴史学的方法と生物学的方法とがある。今まで地理学では、社会経済史家マルク・ブロックの強い影響を受けて、歴史的方法のみが用いられて来た。しかしこれによれば、資料とする文献の所在は限られており、それをもって全地表をおおうわけではないから、対象を空間的に調べることは不可能である。したがって、存在が空間的に制限されていないものを対象とする生物学的方法こそ、全世界に亘る地理的研究を可能にする正当なものといえよう。右のような説の当否はともかくとして、フランス学派にとって必らずしも明確に定義づけられず、いわば惰性的に用いられて来た歴史的方法は、シヨレーの投じた一石によつて、深い反省の機会を与えられたことは、確かであろう。

### 三

地理学界においては、伝統的ともいうべき歴史的素養の要求と歴史的方法の尊重にもかかわらず、それからの意識的な離脱が根強く試みられているのに反し、歴史学界の側では、地理学への接近あるいはそれを包摂しようとする傾向さえみられるのは、日本の現状に顧みて、筆者が多少とも驚きと羨望を感じたところである。とくに社会経済史学界において、この傾向は顕著であるといえる。マルク・ブロックのフランス農村史に関する名著<sup>⑥</sup>が、シオン、アリス、アルボス、ブランシャール、ドゥマンジョン、フォーシェ等地理学者による詳細な地誌研究を、十分にそしやくし、自己の血肉と化していることは、なおわれわれの記憶に残っている。またルシアン・フェーヴルが、地理学に対してなみなみならぬ理解を示しているのは、「大地と人類の進化」によつて明らかに証拠立てられるであろう<sup>⑦</sup>。すでに他界したこの二人の碩学(ブロック……一九四四年)が、一九二九年に始めた *Annales, Economies—Société—Civisations* は、社会経済史関係の雑誌の従刊である。しかしながら、その中にしばしば地理学関係の論文が記載され、

またこの方面の学界動向が、フェーヴルその他によって概観されているのは、二人の創立者に指導された史学界全体の地理学に対する深い関心によるものである。

時代は移った。しかしアナールは続き、フェーヴルの精神は常に生きている<sup>⑩</sup>。創始者なき跡を受けつぎ、広汎な活動によって、この雑誌をして、学界に不動のものたらしめている主宰者の一人が、オート・エチュードのエコール・プラティックで所長を勤める、フェルナン・ブローデルである。この白髪温容な教授の考えによれば、歴史地理学は、歴史・経済・社会・地理のすべてを包含したような、まことに幅の広いものである。彼はフィリップ二世時代の地中海世界を取扱った名著<sup>⑪</sup>の中で、格調の高い筆をもって、ジェオイストアール（地歴史学）を主張する。彼の述べるところに従えば、このあまり聞きなれない科学は、歴史の決定論的な解釈でもなければ、ゲオポリティクをまねたものではさらさらない。今までの伝統的な歴史地理学が、単に国境や行政区劃の変遷などを問題とするに留まったのに反し、新しいジェオイストアールは、気候から、土壌・植物・動物・生活様式等に至るまでの万般を取扱うべきである。それは過去にさかのぼる本当の人文地理学である。地理学者はもつと時間を、歴史学者はもつと空間を認識しなければならぬ。むしろ両科学は一点に集中 convergence さるべきである。時間といい、空間というも、それらは単に認識の手段にすぎないもので、特殊化されたものである。目標は人間にあって、空間も時間も、人間の属性にすぎない。

以上が、フェーヴルに捧げられた大著の主張である。ブローデルは、それを実証するために地中海を選んだ。そうしてかかる見解は、あたかも離れようとする地理学の上に大きい網をかぶせて、手元にたぐろうとする感がある。

このような呼びかけに対して、歴史の方からも、地理の方からも、永い間ほとんど反響らしいものはあらわれなかった。ようやく一九五六年に至って、アルザスの地理学者エチアン・ジュイアールが、フランス学派の最大公約数的な批判的見解を、表明するめぐりとなった<sup>⑧</sup>。

彼はまず、ジュオイストアールの主張に対する反響が、あまり無かったことを確かめ、歴史と地理との関係について、ダービーがいうごとく、(一)歴史学に役立てられる地理学、(二)過去の地理学、(三)地理学に役立てられる歴史学、(四)現在の地理学に役立てられる過去の地理学……の四つのケースを挙げたのち、大要つぎのように批判する。

すなわち、ブローデルの「人間」にせよ、ルラヌーの「社会」にせよ、それを総合的に把握し、高度の研究をなすような、「一種のスーパー社会科学」の樹立は、個人の能力ではとうていできないことがらである。それが可能なブローデルは、まれな例外中の一人である。 「人間」は、選択が行われなければ、取扱いえない。フランス学派の始祖ヴィダルは、歴史学から来た人であるが、彼は史学と地理学とを明確に区別し、地理学は場所に関する限りにおいて歴史的事件をとりあつかうものであることを、明言している<sup>⑨</sup>。ピエール・グールも述べる如く、人間は特定の文明の仲介によって自然環境を利用するものであるから、地理学者は人間による空間経営の諸段階を説明するために隣接科学とくに歴史学に頼らねばならない。しかしこのような場合、当然選択がなされるべきであって、それは、土地とか拡がりとかの観点、局所的・地域的差違の研究の面から行われる。地理学者が過去を追及しても、過去それ自身のためにもなければ、まして事件の継起を調べるわけでもない。

他方、歴史学者は、今まで地理的環境を忘れがちであり、しかもそれを不変の枠として考えて来た。しかし、地理



的環境は、さまざまの要素のコンプレックスであつて、かつそれは不変ではない。歴史の研究は、この点を考慮の外に置いては、全きを期しえられない。この意味で、ブローデルの主張は確かに傾聴に価するものを持つてはいる。けれども史学と地理学とは、たとえ同一の対象に關していても、それらは異なつた二つの態度、相補い合う二つのものである。このように説明したのち、ジュイアールは、再び先述のダービイの説に戻る。

さきほどの四つの組合せの中で、(一)の「枠の中の歴史」と(三)の「枠の歴史」とは、歴史学に属する。そうして、その方法のあるものは、地理学に頼らねばならない。これに對し、(二)と(四)とは、ひとしく地理学の中で結び合わさるものである。対象が現在にあるうと、人類史のいかなる時期にあるものであらうと、地理的事象の説明のためには、過去にさかのぼらねばならない。この場合に、適及的な時間の永い地理学と、現在の短かい瞬間に限られる地理学との、二つがあるのではない。あるのは、すべての時代に適用される唯一の地理学的観点である。したがつて、この意味において、地理学は歴史学の研究成果を大いに利用することができる。こう考えてくると、社会史と人文地理学との境界論争などは、無意味となつてくる。お互に助け合わねばならない史学と地理学とは、おのおのその独自性を持つており、同じレアリテの上に、各自個有の照明を投げかけるものである。

ジュイアールによつてなされた右のような反論を始め、他の地理学者たちとの對話の際にえられた諸批判は、ジェオイストアールについて、さまざまな疑念をいだかせるものであつた。またエコール・プラティックの業績の現状や、ブローデル教授の最近の考え方を知ることが、充分に興味をそそる。かくて予期しないことから、アンヴァリッドに近く、ヴァレンヌ通りに面する彼の研究所に招れる機会をもつた筆者は、その後数度に亘つて、ここを訪問することとなつた。ビューローの上には三つの製図室があり、そこでさまざまの歴史地図を製作していることは、非常な

刺戟を受けたことがらの一つであつた。一日、意を決して、ブローデル教授が、今もなお一九四九年当時と同じ見解を保持しているかどうかを、たずねてみた。たしかに史学と地理学とを合するような研究は、容易なわざではない。しかしわれわれは、それを着々と実行しているとの答えである。そうして筆者に与えられたのは、アルブロー等によつて、十六・七世紀におけるセヴィラの状況を、多くの地図とグラフとで示した著書その他であつた<sup>⑧</sup>。地理学者の批判にもかかわらず、ジェオイストアルは、今や単なる主張の段階から一步を進めており、またそれは個人よりもグループの研究における指導理念にまで、成長しているのである。

#### 四

しからば、個有の歴史地理学界の動向は如何。それについて語るまえに、何を以つて個有の歴史地理学界とするかが、まず問われねばならない。フランスにおいて、この方面では唯一ともいふべき雑誌としては、*Bulletin de géographie historique et descriptive* が、従来から知られていた。これは、一九一二年に *Ministère de l'instruction publique et des beaux-arts* の中に、*Comité des travaux historiques et scientifiques* が組織され、その編集によつて、パリの国立印刷所から出版されていたものである。なおこの委員会は、一九一四年に *Comité des travaux historiques, section de géographie* と改称されている<sup>⑨</sup>と云ふで、その内容たるや、会報・書評および例会記事によつて埋められ、ちよつと官庁の委員会報告書とでもいふべきもので、大部ではあるが、まことに味気ない感じがする。例会報の中には、たとえばオルレアンにおけるケルト起源の地名とか、仏西国境の問題とか、あるいは十世紀のノルマンデイとかの如く、本来の歴史地理的な研究がみられるが、地誌も自然地理も含まれ、そのために地理・歴史未分化のままの公式報告書という印象が避け難いのである。

さきあげたドゥマンジョンやペルピエウの副論文を、歴史地理学の業績に数え入れても、さほど異論はなからうと思われるが、これ以外に、どのような専門書があるだろうか。筆者は議論の公平を期するため、ソルボンヌの地理学研究所において、ビブリオテックの中で、歴史地理学の部類に属せしめられている書物のすべてを、メモにとるごととした。これならば、フランス人の常識を、曲げて伝える恐れはないからである。しかしながら、正直に言つて、筆者は、その数の少ないことに、驚かざるをえなかつた。それらの中で、めばしいものとしては、シオンの東ノルマンデイの農民に関する研究<sup>⑧</sup>、ブリュンヌとヴァローとの共著<sup>⑨</sup>、先述のフェーヴルの批判的な著書、再版されたミローの概書<sup>⑩</sup>、ドゥマンジョン・フェーヴルその他の協力によるラインの歴史と経済を取扱つたもの<sup>⑪</sup>、ロジエ・デイオンによる有名なフランスの農村景観形成に関するエッセイ<sup>⑫</sup>およびフランスの国境を論じた小著<sup>⑬</sup>等が、あげられるにすぎない状態なのである。

ここでは、地域的な研究に触れないでおこう。そうすれば、ブリュンヌとヴァローによる「歴史の地理学」が、まづ問題となる。本書は、歴史が地理の中にあられ、地理が歴史の中にあられるという事実を背景として、歴史的事件の地理的因子を探ろうとするもので、これは若干ジェオイストアールの考え方に通ずるが、全体として地理的歴史学の色彩が濃厚である。ブリュンヌは後に、地理の歴史と歴史地理学とを明確に区別し、前者は歴史学に属するのに対し、後者は「歴史的發展において研究される地理学……各年代を追うての土地の記述……地表の部分の地域的發展の研究」であるとしているし<sup>⑭</sup>、ヴァローもまたのちに、地理学の補助科学としての歴史地理学に説き及んでい<sup>⑮</sup>る。しかしながら、理論の点ではともかく、実際の研究面においては、歴史地理学をして、戦争や政治や地図の歴史に関する研究の偏重に向かわしめている嫌いは、拭いきれない。フェーヴルについては、歴史地理学の問題は、人文地

理学全体の一般的な問題と異なるところがないとする、優れた見解を思い起こさせるが<sup>⑧</sup>、彼がこの方面においては批評者もしくは紹介者の立場にあった故、ここに改めて論ずる必要はなからう。ミローは、地理学界においてはあまり知られていない人である。彼はその立場上、利用し易い国立史料館蔵の諸史料を駆使して、一書を仕上げたのであって、それは境界・地名等を取あげる旧式の歴史地理学の域を出るものではない。

このようにみてくると、最後にディオオンが残ることになる。彼こそ、地理的歴史学へも走らず、政治や地名に限られた伝統的研究方法から脱却し、歴史と地理との未分化な方法的あいまいさを許さない、正真正銘の歴史地理学者であろう。コレージュ・ドゥ・フランスの歴史学科において、歴史地理学の講座を担当するのも彼である。

ロアール谷の詳細な地誌的研究<sup>⑨</sup>によって、すでに広くその名が知れ亘っていたディオオンは、一九四八年十月四日コレージュ・ドゥ・フランスにおける開講講義に際して、歴史地理学に対する自己の見解を、初めてまとまった形で表明した<sup>⑩</sup>。それは、歴史学との関係が明瞭でなく、政治もしくは地名地理学と混同されがちであったフランスの歴史地理学界に、全くの新風をもたらすものであった。

彼によれば、地理を歴史に結び付けないと、根本的に人文化された景觀を説明することが不可能であるという考えは、フランスでは、今から一世紀以上も昔のミシュレーに始まっている。ミシュレーはかかる立場から、一八三三年に *Tableau de la France* を発表し、五年後に、コレージュ・ドゥ・フランスの教授に任命された。それは歴史およびモラルの講座を担当するためであった。しかし、残念ながら、当時はまだ地理学の講義は行われていない。一八八五年に、ルヴァセールが地理・歴史および経済統計の教授に就任することによって、このきわめてアカデミックな学園に、始めて地理学の名が正式に登場するわけで、そのほか今世紀の初頭に古代史の講座の中で、ガリア史の地理

的諸条件を講じていたジュリアンも、地理的歴史学ながら、この方面の研究の発展に、相当の寄与をなしたものと見えよう。さらに、一九一二年には、ブリュンヌのために、新しく人文地理学の講座が創設された。それは一九三三年に、シーグフリードのための経済および政治地理学の講座に引きつがれたが、ここに至って、コレージュ・ドゥ・フランスでは、ソルボンヌと並んで、その地理的研究が、世界的な盛名をうるまでの飛躍をとげた。しかしながら、ブリュンヌは、人文地理学と歴史地理学とを明確に区別したが、その歴史地理学なるものは先述の如くであって、さらに彼は純粹の人文地理学的研究にとつて、フランスはあまり適當ではないとさえ考えていた。またシーグフリードが、政治的意見の地理的研究に没頭したことは、周知のところである。このようにみえてくると、多くの先驅者の諸業績を部分的に引つぐとはいうものの、ディオンのための新しい講座の開講は、この国における歴史地理学の発展にとつて、まことに大きい現実的意義をもつものであつた。あまつさえ、彼のおかげで、歴史地理学は、一応の理論的体系さえ獲得することができたのである。

さて、ディオンは抽象的理論を好まないながらも、歴史地理学は、第一に考古学、第二に土地占居の歴史学、第三に人文景観の解釈をもつて、主内容とすべきものと考ええる。

彼のいう考古学とは、かなり広義のもので、遺跡の復原や栽培作物の歴史までをも含んでいる。こういう考えから彼は別の箇所で、この国における歴史地理学の起源を先史学に求めているのである。遺跡の問題に関しては、彼自身北フランスにおけるローマ軍道を復原しており<sup>⑧</sup>、栽培作物に関しては、古代・中世におけるぶどうおよびぶどう酒製造分の布や輸送を論じた、ぶどうの歴史地理とでもいうべき論文<sup>⑨</sup>、さらにそれが発展した近<sup>⑩</sup>著がみられる。日本において盛んな条里制研究に対比されるのが、ケントウリアの復原であるが、これはフランスでは主に考古学者の

仕事に委せられていた。しかし最近では、地理学界からも、ジュイアールのアルザスに関する<sup>⑧</sup>、フアコンのシャラント河流域の一部<sup>⑨</sup>に関する研究等があらわれるに至っている。ディオンの主張は、それらの研究の立場を固めるに役立つであろう。

しかしながら、ディオンによれば、人間の労働の具体的な意義を把握するには、それが行われた年代を明確にするだけでは充分でなく、その空間における立地を説明しなければならぬ。すなわち歴史地理学は、広義の考古学であると共に、人類が形成したものの位置について、その選択の理由を追及すること、いいかえれば土地占居史でもあるわけである。今までこの方面の研究は、強いて自然条件との関連に重点が置かれていたが、むしろ重要なのは、経済的・歴史的・政治的事情の方である。パリ盆地の集落に例をとると、一七六〇年ころの大地主は、村落協同体は未開時代の名残りと考えて、散居農場の建設に向っている。同じ地域においても、このように時代によって、あるいは集居への、あるいは散居への傾向がみられるのである。このような主張については、彼がかつてパリ盆地の村落を論ずるに当り、まず最初に地理的条件から分析して行き、地理的説明が可能な限界を明確たにのしたち、そて単なる域における経済・政治の歴史的発展から、残りの部分の説明をしているのが、思い起こされる<sup>⑩</sup>。彼のすぐれ見解は、決し理論ではなく、実証的研究の間に来たえられたのち、おもむくに結晶して来たものであるろう。フランス国境に関する彼の労作も、この部類に属せしめることができる。ドゥマンジョンを始めとして、フランス学派が、農村集落や農地構造の研究について行った貢献は、まことに多大である。これらの多くは、同時に土地占居史に関係している。それをここに列挙する煩を避けたいが、とくに最近では、アンドレ・メイニエの業績がめだっていることは、この国の学者がひとしく認めるところである。彼の農地景觀についての近著<sup>⑪</sup>は、その代表であると考えられる。

最後に、ディオンは、以上のものを含めてすべての人文景観は歴史の反映である考える交通や工業は、新しい景観の形成に、創造的な働きを示し、いろいろの古い条件は今日ではその価値を失なつた。しかしながら、フランスの経済は、多くの面で、最近まで過去の姿をとどめていたのであつて、そのような物質的現実ならびにその力を把握するためには、歴史地理学に頼らねばならない。つまり、ディオンの意図するところは、人文景観の解釈は、単に現在のみからは不可能であつて、それが過去にさかのぼらねばならない場合、この面を担当するのが歴史地理学であるといふにある。土地占居史をも含めて、この意図の一部は、先述の農村景観の形成に関するエッセイの中に、すでに実現されていた。しかし、景観の復原や進化の研究に関しては、この分野の専門家が多いイギリスの方が、一歩進んでいるような印象を禁じえない。

残念ながら、彼が人文景観という場合、現在および歴史の諸時代におけるという註釈を、つけ加えておかなかつた。だがジュイアールも述べていた如く、永い歴史時代の地理学と現在の短かい瞬間の地理学との、二種の地理学があるわけではないとする、フランス学派の考え方からすれば、当然両者を包括させてよいものであろう。景観の中にさまざまなものが含まれている。ブローデルは、ジェオイストアールを主張する際に、伝統的歴史地理学の狭い限られたものから、対象を拡げるように忠告した。ブローデルとディオンの、この日頃から意思疎通がよく行われている二人の碩学は、ともに旧来の歴史地理学の欠陥を熟知し、新しいものを樹立しようとした。しかし、方法論の上で、一方は歴史と地理との統合を図り、他方は歴史地理学の固有の領域を守ろうとする。われわれは、いずれに加担すべきであらうか。恐らく後者でありたいとする筆者は、その実際の研究の多くは、フランスではなお今後の課題であるといふ印象を懷いて、パリを離れた次第である。(一九五九・十二・十八記)

- Ⓒ Sorre, Max. et autres: La géographie française au milieu du XX<sup>e</sup> siècle, Paris, 1957. pp. 7—12
- Ⓓ Dicn, R.: Leçon d'ouverture du cours de géographie historique de la France, Publications de la Société de Géographie de Lille, 1947—1948, pp. 9—27
- Ⓔ Cholley, A.: Emmanuel de Martonne, Ann. de Géogr. N° 347, 65<sup>e</sup> Année 1956, Cholley, A.: Tendances et organisation de la géographie en France, dans l'ouv. cité. 1957
- Ⓕ de Martonne, Emm.: Albert Demangeon, 1872—1940, dans "Demangeon, A.: Problèmes de géographie humaine," Paris, 1942
- Ⓖ Demangeon, A.: La plaine picarde, Picardie-Artois-Cambrésis-Beauvais, Étude sur les plaines de craie du Nord de la France, Paris, 1905
- Ⓗ Demangeon, A.: Les sources de la géographie de la France aux Archives Nationales, Paris. 1905
- Ⓘ Demangeon, A.: Une définition de la géographie humaine, dans "Prob. de Géogr. hum." 1942
- Ⓚ Perpillon, A.: Le Limousin, Étude de géographie physique régionale, Paris, 1940
- Ⓛ Perpillon, A.: Cartographie du paysage rural; Limousin, Paris, 1940
- Ⓜ Cholley, A.: Problèmes de structure agraire et d'économie rurale, Ann de Géogr. N° 298, 55<sup>e</sup> année, 1946
- Ⓝ Demangeon, A.: Économie agricole et peuplement rural, Ann. de Géogr. N° 241, 43<sup>e</sup> Année, 1934
- Ⓟ Bloch, M.: Les caractères originaux de l'histoire rurale française, Oslo, 1931, Nouv. éd. Paris 1952
- Ⓠ Febvre, L.: La terre et l'évolution humaine, introduction géographique à l'histoire, Paris, 1922
- Ⓡ Friedmann, G.: Lucien Febvre toujours vivant, Annales, Économies-sociétés-civilisations, N°I, 12<sup>e</sup> Année,



1957

- ㉔ Braudel, F.: La Méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II. pp. 295—304, 1949
- ㉕ Juillard, Ét.: Aux frontières de l'histoire et de la géographie, Revue historique, Av.-Juin, 1956
- ㉖ Vidal de la Blache, P.: Les caractères distinctifs de la géographie, Ann. de Géogr. 1913, p. 298 地理学
- ㉗ Arbellot, G., Bertin, H. J. et Chaunu, P.: Séville et l'Atlantique, 1504—1650, T. V II. 1957
- ㉘ Sion, J.: Les paysans de la Normandie orientale, 1909
- ㉙ Brunhes, J. et Vallaux, C.: La géographie de l'histoire, géographie de la paix et de la guerre sur terre et sur mer, Paris. 1921
- ㉚ Mirot, L.: Manuel de géographie historique de la France, Paris, 1<sup>er</sup> éd. 1929, 2<sup>e</sup> éd. 1950
- ㉛ Demangeon, A. et autres: Le Rhin, Problème d'histoire et d'économie, Paris, 1935
- ㉜ Dion, R.: Essai sur la formation du paysage rural français, Tours, 1934
- ㉝ Dion, R.: Les frontières de la France, Paris, 1947
- ㉞ Brunhes, J.: La géographie humaine, T. II. pp. 921~922, Paris. 1925
- ㉟ Vallaux, C.: Les sciences géographiques, pp. 370~388, Paris, 1925
- ㊱ Febvre, L.: Ouv. cité, p. 442
- ㊲ Dion, R.: Le val de Loire, Étude de géographie régionale, Tours, 1933
- ㊳ Dion, R.: Leçon d'ouverture, ouv. cité.
- ㊴ Dion, R.: Les voies romaines du Nord de la France étudiées sur les cartes, Pub. de la Soc. de Géogr. de Lille, 1944~45, pp. 5~35

- ⑤ Dion, R.: Grands traits d'une géographie viticole de la France, Pub. de la Soc. de Géogr. de Lille, 1er part. 1943, pp. 5~69, 2e part. 1948~49 pp. 6~45
- ⑥ Dion, R.: Histoire de la vigne et du vin en France des origines au XIX<sup>ème</sup> siècle, Paris, 1959
- ⑦ Juillard, Ét.: Formes de structure parcellaire dans la plaine d'Alsace, Bull. de l'Assoc. de Géogr. Fr. N° 232~233, 1953
- ⑧ Facon, R.: Un terroir du Sud de la Charente. Bors de Montmoreau, Acta géogr. Fas, 27, 1958
- ⑨ Dion, R.: La part de la géographie et celle de l'histoire dans l'explication de l'habitat rural du Bassin Parisien, Pub. de la Soc. de Géogr. de Lille, 1946
- ⑩ Meynier, A.: Les paysages agraires, paris, coll. A--C. 1958